
大きな背中～先生と私～

いちごもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな背中〜先生と私〜

【Nコード】

N9369D

【作者名】

いちごもも

【あらすじ】

普通の女子高生と既婚者の体育教師との恋の物語。お互いの気持ちを通じ合っているにも愛し合うことは決して許されない。先生？ももう少し早く出逢っていればね？？

（前書き）

普通の女子高生が真夏の8月に恋をした。その人は学校の先生。そして既婚者。想いが通じ合っても愛し合うことは許されない…。それでも純粹の恋をしていた…。

お父さん

お母さん

ごめんなさい

今まで育ててくれて

一生親不孝なことは

絶対にしないと

思ってた

でもね…

愛する人が出来たの

その人は

同じ学校居て

私の目線より高い

『教壇』と言う所で

チョーク片手に

話してる人…

そして

家庭を持つてる人…

愛すれば

愛するほど

罪を重ねるの

辛いのはわかってる

許されないって

わかってる…

それでも

好きなの

愛してるの…

一番じゃなくてもいい

好きで居させて？

『先生？』

愛しい先生がいる

体育準備室へ

『なした？』

愛しい人の声

『ッ…………。』

それだけで照れる私

『あの…ね？私…』

言いかけたその時

『知ってる』

コーヒーを口にしながら

ボソツと先生が言った

『えっ！？』

驚きすぎて

変な声を出した私

それを笑いながら

私を見つめる

『顔…真っ赤!』

目尻にシワを寄せ笑う

『……。』

何も言えなくなった

ホントに真っ赤だったから

『いいよ、
言って?』

コーヒーカップを置いて

私の目線と合わせる

『我慢は…辛いだけだぞ?』

そう言いながら

私の頭を撫でる

『…想つててもいいですか？』

そう小さな声で

ついにあなたに…

先生に…

想いを伝えた

答えなんてわかつてる

先生には

愛する奥さんがいる

お子さんがいる

フラれる覚悟で

言っただ…

『……何もできないよ?』

窓から見える

青空を見ながら

先生はそう言った

一瞬

空気が止まった…

何言ってるの?

えっ?

なんで?

自分から言っという

先生の答えに

疑問をもつ私

『えっ！？』

口を手で抑え

驚く私

『…何もできないよ』

今度は私の顔を見ながら

どうして…

どうして先生が

泣きそうな顔してるの…

どこまで先生は

いい人なんですか

悪いのはすべて

私なのに…

『いいの、好きでいたいただけ』

先生の目を見て

私は言った

『……………』

黙り込む先生

『いやっ！いいの！やっぱり迷惑ですよね…………』

少しの間も嫌で

明るく振る舞った

『いいんです、すみませんでしたっ！』

早くその場から

去りたかった

急いで体育準備室を

出ようとした…とき

『まって！』

先生の大きな手が

私の腕を掴んだ

『俺…何してるんだろ』

無の顔をしている先生

『君に会ったびに…怖いんだ』

先生の手が震えていた

『君を見るたびに俺は…目で追ってる

そんなこと言われたら…

断るにも断れないだろ？』

先生の目に光る涙が…

あつ…私が泣かせたんだ

私は

震えている先生の手を

重ね合わせ

握りしめた

『怖いんだ…

本気になるのが

怖いんだ……

教師だって…既婚者だって…

恋はするんだ…」

ついに先生の目から

涙が頬に流れた

私だけが

辛かったんじゃない

先生も

辛かった…

私以上に……

『ごめんね…

ごめんね、先生…』

いつの間にか

私の目にも涙が…

二人は手を

強く握りあつた

『好き』

『愛してる』

なんて

言葉にしない

これ以上になれば

罪になることくらい

高校生でもわかる

ますます

一緒に居られなくなる

『泣かせてごめんな』

先生が優しく

私の涙が拭く

大きく首を横に振る私

『笑って？』

君の笑顔は…

俺の太陽だから』

窓の方を指差して

私に向かって話す

『先生…』

その言葉に

また愛しさが増す

そして笑う…

『太陽みたいだな、ホント』

私の頬を擦りながら

先生も笑う

ねえ…先生？

先生にとって

私は太陽ならば

私にとって

先生はお星さまだよ

キラキラ先生が

私を照らし続けるの

たくさん…

無限大にね

『ピンポンパンポン♪

至急職員室まで』

先生を呼ぶ放送がかかる

『行かないや』

つと言って

急いでティッシュで目を拭く

そして…

『いつでも来いよ!』

自分の机の椅子に

指を指しながら

笑顔言ってくれた先生

『はいっ!』

満面の笑みで…

先生に返す

『じゃな、気をつけて帰れよ』

体育準備室のドアノブに

手をかけ

片手で私に手を振る

職員室へ向かう

先生の後ろ姿…

大きくて

頼もしい

背中…

ずっと

先生のその大きな背中を

追いかけた

叶わないって

わかってたけど

先生と心が

1つになった

真夏の8月の日…

いつまでも

先生の

太陽でいますー…

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。このお話は実話で、何かに残しておきたいと思い小説にしました。良ければコメントを…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369d/>

大きな背中～先生と私～

2010年10月18日21時40分発行